

液晶実用化30年 ハイビジョン開発40年



日本放送協会
総合企画室〔デジタル放送推進〕
局長

竹中 一夫

2004年1月28日、私たちが待ちに待ったニュース「シャープ亀山工場、初出荷式」が配信されました。次世代の液晶大型テレビを実現するベースとなる嬉しいニュースでした。シャープ(株)のホームページを拝見すると、液晶の実用化に初めて踏み切られたのが、1973年だったとありました。それから30年余りたった今、新しい亀山工場から月産10万台の液晶テレビが出荷され、しかも今年8月には増産し、32型を中心に20万台が毎月市場に投入されるとのこと、開発に参加された皆さんのお気持ちを考えますと、30年の節目の年の感慨はいかばかりかと推察いたします。家庭内のテレビ受信機は、高画質、高機能を持つ総合情報端末に進化していくことが予想されます。亀山工場産の「AQUOS」が、その中核的な役割を果たしていただけると信じています。

ここ数年、自宅近くの家電大型量販店をのぞいて回るのが休日の過ごし方のひとつになりました。入り口から最も目立つ場所にあるのがテレビ受信機のコーナーなのですが、液晶とPDPのいわゆる“板”型テレビが常に占拠するようになり、これまでの“箱”型テレビのブラウン管タイプは隅に追いやられ、占める面積もどんどん少なくなっているように見えます。32インチから50インチの“板”型テレビを買わないと時代遅れになってしまうような展示の様子で、店員さんの説明もデジタルテレビは薄型“板”の高画質、消費電力、寿命など詳細な口説き文句で、液晶テレビをすすめてくれるようになりました。“箱”から“板”へのトレンドはもう誰も止めることのできない社会の流れになっていると確信しています。

昨年12月1日から東京、名古屋、大阪の3つの地域で地上デジタル放送がスタートしました。NHKは、デジタル総合テレビの約90%をハイビジョンで放送しています。さらに、今年の夏からは順次本格設備に切

り換えがすすみ、デジタル教育テレビもハイビジョンを中心とした高画質化とデータ放送による高機能化を実現していきます。しかし、全国的に見ると、地上デジタル放送をご覧いただけるのはまだ約1200万世帯です。増力により受信可能エリアは拡大していきますが、出来るだけ早くハイビジョンの魅力、データ放送の面白さを体験していただくためには、BSデジタル放送の普及が大切と考えています。今年2月末までに525万世帯の皆さんにご覧いただいておりますが、今年はずいぶん、地上デジタル放送がまだ放送されていない地域でもBSデジタル放送を楽しんでいただき、600万、700万世帯と多くの方々に見ていただけるよう普及に努めていきたいと考えています。安心してご覧いただける“安心テレビ”“デジタルテレビ”が私たちのキャッチフレーズです。

全国の視聴者の皆さんに“デジタルテレビ”を安心して買っていただくためには、放送事業者は、より魅力的なコンテンツを提供していく努力を続けていかななくてはなりません。そして視聴者の皆さんに買っていただきやすい、すぐれた受信機を提供していただけるメーカーの皆さんの力が相まって普及が進んでいくものと考えています。

今年は8月にアテネオリンピック大会があり、2002年のソルトレーク冬季オリンピック大会に引き続き、公式の国際信号制作をハイビジョンで行う共同制作の準備を進めています。PALデジタル（アスペクト比19:9）も含めて、開閉会式、陸上、水泳、体操、新体操、柔道、バスケットボール、テニス、自転車、野球、サッカー、ハンドボール、バレーボールと、これまでにない充実した競技内容がハイビジョンをはじめとする高画質で収録されることになり、遠く離れた日本国内でも、NHKと民放が協力して充実した種目を高画質でお届けすることになっています。

思い起こせば、ハイビジョンの開発とオリンピックとは不思議な赤い糸で結ばれているような気がします。次世代のテレビの研究がNHK放送技術研究所でスタートしたのは、1964年の東京オリンピック大会の頃でした。実際にハイビジョンカメラとVTRの試

作機が完成し、初めてオリンピック映像の素材収録に挑戦できたのは1984年のロサンゼルス大会でした。その後1988年ソウル大会ではMUSE方式による実験放送、1992年アルベールビル冬季大会では社団法人ハイビジョン推進協会によるハイビジョン試験放送と、時代とともに機材の改善と放送量の拡大がなされてきました。そのハイビジョンの開始からちょうど40年を経た今年、アテネオリンピック大会の中継放送に象徴されるように、ハイビジョンは国内でも海外でも、イベントで収録する当たり前の技術として世界に認められ、映画製作の面でもCGとの合成能力の特性を買われて、多くの著名な監督に使われるツールとなっています。

私がハイビジョン映像が将来の放送の中核になると確信したのは、信州大学医学部で記録された脳外科手術の映像に出会った瞬間でした。1インチデジタルVTRに収録された顕微鏡下の手術の映像は立体的に見え、これまでに見たフィルムやVTRとは比べられない程の情報量を持った強烈な映像でした。当時はデジタル映像で収録したベースバンド映像をそのまま放送することができず、アナログのMUSE方式によって画質を犠牲にして放送する技術しかない時代でしたが、将来は必ずこのデジタル映像のクオリティーをそのまま放送できる時代がやってくると確信することができました。

液晶開発30年、ハイビジョン開発40年、と簡単に今年の節目を言い表すことができますが、おそらく多くの方々の苦悩、努力、失敗が積み重ねられ、支えていただいた結果が現在なのだと思います。今年はそんな思いに恩返しをする飛躍の年にしたいと思います。

“死の谷”や“ダーウィンの海”とか厳しい現状を言い表す言葉は増えました。しかし、やはり“物をつくる”人々の心と気持ちが一番ではないでしょうか。番組づくりも物づくりと同じです。今の成功をただ喜ぶのではなく、次の時代にどうバトンタッチしていくのか、そんな事を考えながら飛躍の年に立ち向かいたいと思います。シャープの皆さん、共にがんばりましょう。